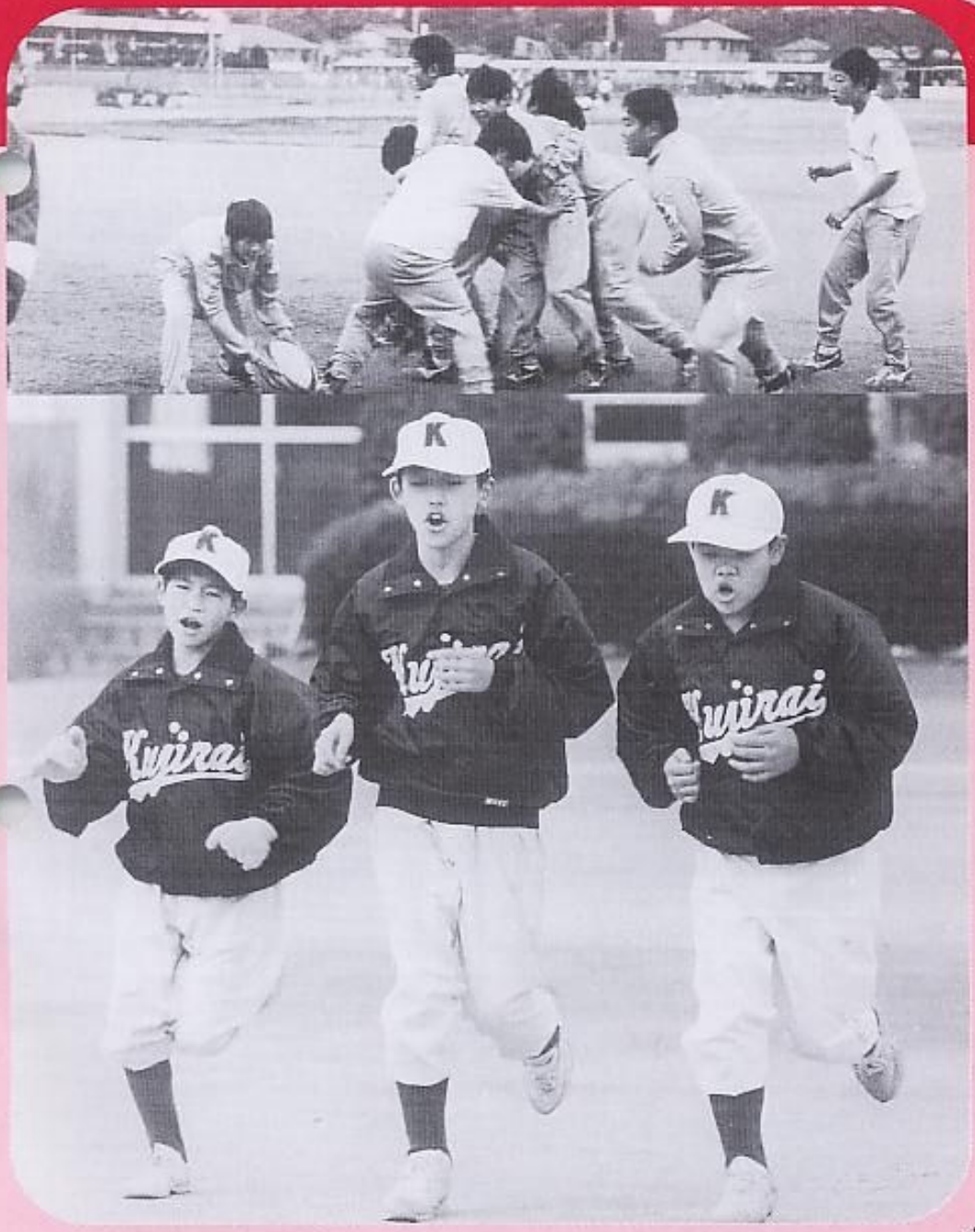
平成10年12月10日発行（毎月1回10日発行）通巻353号　昭和46年1月18日第3種郵便物認可

Sports スポーツ少年

1998 12



●特集

中学生のスポーツはどうなっているのか
―生涯スポーツの架け橋として―

ふやそう仲間　広げようスポーツの輪

SHIPS

KEIRIN 競輪補助事業

財団法人 日本体育協会日本スポーツ少年団

Sports スポーツ少年

12月号もくじ

提言

ふやそう仲間
広げようスポーツの輪

日本スポーツ少年団
副本部長
内田　元彦

日本のスポーツは、いま大きな変革期に入ろうとしています。なかでも、子どもたちを取り囲むスポーツは情報化の渦に巻き込まれており、多くの子どもたちは一番大切な自分を忘れ、ひたすら流行スポーツ志向に走ってしまう傾向があります。

学校の部活や地域クラブ等の活動は少年期にとっては大きな夢です。未来への願望もこの時期に芽生え、人生の大切な糧となることは周知の事実であります。

スポーツ少年団も、そんな子どもたちの夢を育むためにできた集団でありますが、これから21世紀に向ってさらに飛躍してゆくためには、学校、家庭、地域が一体化されたなかで、子どもたちが伸び伸びと活動できる環境づくりをすることが急務と思います。

家族、友人、先輩という縦の社会と、スポーツがもたらす感動や連帯感を、地域という横の社会に結び付けた広い意味のスポーツ活動が必要です。

そのためにも、従来の「スポーツ少年団」を、さらにこれを核とした「総合型地域スポーツクラブ」に統合育成し、子どもたちがやがて大人たちの仲間入りを果たしたときに、過去そして将来を共に語り合えるような「生涯スポーツ環境」を実現したいものです。

＜特集＞

中学生のスポーツはどうなっているのか
ー生涯スポーツの架け橋としてー

公立中学校での運動部活動の実情 …… 3
中学校の指導現場から …… 8
部活動とジュニアスポーツ …… 10

新連載◎総合型地域スポーツクラブの実践事例①
総合型地域スポーツクラブの推進に求められるクラブの自律的取り組み…13

お知らせ／文部省「総合型地域スポーツクラブ」パンフレット …… 17

連載●イラストでみる子どもの心とからだ⑭
子どものスポーツ心理学概論／山田ゆかり …… 18

連載●絵ッセイ　スポーツのふるさと⑮
わらべたちの四季／池原昭治 …… 20

連載●指導者アイディア手帳⑦／井上輝伸 …… 22

連載●シップス博士のハロー！　スポーツ …… 24

1998年「日独スポーツ少年団指導者交流事業」終わる …… 26

連載●広げよう地域の輪ー学校とスポーツ少年団③
地域と連携する学校型スポーツ少年団
～高萩北スポーツ少年団（埼玉県日高市）／佐藤高弘…28

日本スポーツ少年団からのお知らせ …… 32

連載●団紹介／団訪問・19
剣道を通して心技向上
～鴻ノ池道場（奈良県奈良市）／岡　邦行 …… 33

平成10年度日本スポーツ少年団登録状況について …… 36

山形県体協からのお知らせ／次号予告／あとがき …… 40

表紙写真　提供／埼玉新聞社

地域と連携する学校型スポーツ少年団

――埼玉県日高市高萩北スポーツ少年団

日高市の6つのスポーツ少年団は、すべて学校単位のスポーツ少年団として発足しました。小学校の教員が自分の学校の児童を放課後に指導したのが始まりで、後に団員の増加により地域の人が指導に加わりました。今では教職員よりも地域の方々が多い指導体制で活動を展開しています。

今号ではこうした団発足当時からの流れや活動の状況などを、学校とスポーツ少年団の連携という視点で捉え、市内6団のひとつ、発足20周年を迎えた高萩北スポーツ少年団にスポットをあてて紹介します。

取材した10月中旬の土曜日、高萩北小学校に地域の指導者、学校の先生、教育委員会職員、そして市本部の方々にお集まりをいただき、お話をうかがいました。また、終了後は、元気な団員たちの活動の様子も見学させていただきました。

小学校クラブ活動がスポーツ少年団に

「昭和47年夏に高萩地区にある高萩小学校で、2人の6年生の担任教員が自分のクラスの子どもたちに野球の指導をしたことがきっかけで、学校野球クラブが発足しました。そして、初めてお隣の飯能市で開かれた防犯少年野球大会に参加。翌48年4月には、市内に仲間を増やそうと他校に呼びかけ4団の結成をみ、5月に団から県本部に登録しました。昭和50年には市に少年野球連盟が結成され、市独自の大会が開かれるようになり団員が増加、スポーツ少年活動への地域や親たちの関心も高まりました。

こうしたなかで、子どもたちに野球だけでなく、サッカーやミニバスケットも指導してほしいという声が子どもや親たちから起き、学校の先生だけでは指導者が足りなくなりました。そこで、地域の人に協力を求めたわけです。これが学校と地域の連携の始まりです」と、団の発足当時から関わ

る、現高萩北小学校の戸田恵校長が開口一番に話されました。

学校と地域が連携して活動することで、各団の活動も一段と活発になり、地域の指導者が増え、親たちの協力も良くなったそうです。

発足から20年の高萩北スポーツ少年団

市内で5番目に発足した高萩北スポーツ少年団を訪ね、関係者の皆さんに20年前の様子やこれまでの活動の様子などをお聞きしました。高萩北小は高萩小から分かれてできた学校で、開校してすぐにスポーツ少年団が発足しています。

当時を知る団長の松田征彦さんからは「高萩小から高萩北小が分かれ、スポーツ少年団が結成されることになり、私も参加しました。最初ですからグラウンドの整備や用具の整備など、いろいろやりましたね」と、苦労話が飛び出しました。続いて、副団長の美松長徳さんは、活動場所の確保について「発足以来、学校のグラウンドと体育館を優先的に使わせてもらっていますから、全く問題はありません」と言われ、さらに「春の団員募集のときには、学校で先生が申込書を子どもたちに配ってくれています」と、何とも羨ましい話を付け加えました。それもこれも、団と学校の関係が良いからできることです。

高萩北スポーツ少年団は、毎週土・日曜を中心に高萩北小学校で活動しています。団の精神は、「根忍知和（こんにちは）」。根気・忍耐・知識・和気あいあいをモットーに活動し、それを後援会がバックアップしています。団員は小学3年生から6年生まで74名、指導者は16名います。女子は年間を通じてミニバスケットボール、男子は4月から8月まで軟式野球、9月から翌年3月までサッカーの2種目を行っています。

小学校にスポーツ少年団窓口の先生が

学校とスポーツ少年団の連携は、さまざまなところでみられますが、特に紹介したいのは、学校内にスポーツ少年団の窓口があることです。窓口を担当するひとり、染谷嘉雄先生は「職員の中で何人かが窓口になっています。活動場所や行事の面など、地域とスポーツ少年団の接点のような役割です。他の先生も理解と協力を示してくれていますから、自分の負担はあまり感じませんね」と話してくれました。

どうしてそうしたことが可能になったのか、その背景を木川本部長は「年1回（6月）、小学校の校長先生、教頭先生、窓口担当の先生、団指導者、後援会長、市本部関係者が一同に会し、意見交換などの交流会を開いています。結構ざっくばらん

メモ／日高市は、埼玉県の南西部に位置し、武蔵野の面影を色濃く残す緑と清流のまちです。面積約48平方キロに約55,000人の人が住み、小学校と中学校、公民館が6地区にそれぞれ1つずつあり、まちづくりを進めるうえで大きな特色となっています。そのため、学校単位のスポーツ少年団も、地域との関係が強くなり結果的には団発展の要因となっています。6団はそれぞれ男子・女子の部があり、野球、サッカー、ミニバスケットなどを行っています。団員は小学3年生から6年生まで、今年度の登録は428名、指導者は141名。なお、市本部の設置は団発足から8年後の昭和56年で、以後2年毎に各団が本部の仕事を持ち回り運営されています。

に意見が飛び交い、理解を深めているからではないでしょうか」と言われます。

子どもの健やかな成長を願う学校関係者とスポーツ少年団関係者が同じテーブルにつき、一緒に顔を合わせることが、まず大切なことなのだと思いました。

団活動を側面から支援する教育委員会でも「学校開放事業で、小学校施設は子どもたちの利用を優先しています」と、安原光治体育課長。こうした行政の活動支援も団発展にとって大きな支えとなっているようです。

21世紀へ向けて更なる団活動の充実を

ご出席いただいた皆さんから、今後の団活動に寄せる思いを一言ずつうかがいました。

戸田校長：学校と少年団の垣根を取り外したい。そのためには、少年団の指導者にも学校の教育方針や目標を理解してもらう必要があると思っています。そうすれば、もっと内容の充実した少年団になるのではないでしょうか。

松田団長：今一番の悩みは、団員の減少です。少子化の影響もあるかもしれませんが、それ以上に子どもを持つ親たちの理解が浅いことが大きい気がします。もっと地域にPRしていきたいと思います。

杉山副団長：指導者の高齢化が進んでいるので後継指導者の育成をしなければなりません。団員OB・OGの発掘やリーダーの養成に、これから力を入れていきたいですね。

美松副団長：楽しい団活動を多くの親たちにもっと見てもらいたい。女子団員の増員がこれからの発展のカギを握るのではないでしょうか。

駒野隆治後援会長：指導者と団員、親たちの仲が良くて安心しています。

染谷先生：教員という立場で少年団に関わっていますが、少年団に参加していると学校内で子どもたちとのコミュニケーションも良く、教育指導の面でも役立っています。全国の多くの先生方に、この良さを知ってほしいですね。

五十嵐信正団会計：親の負担を少しでも軽減できるように、裏方でがんばります。

安原体育課長：ボランティアで活動する少年団の指導者には、いつも感謝しています。今後は地域のボランティアの存在がまちづくりにも大きな影響をもたらすでしょう。少年団の指導者が先駆的にリードしてほしいですね。

ねらいをさだめて、ゴールネットへ一直線

岡野一平副本部長：少年団に関わって20年になります。多くの子どもたちに幅広い体験をさせてあげたいと思っています。教員という職業柄染谷先生と同じような思いです。

尾島國太郎副本部長：やはり団員の減少傾向は深刻です。しかし、2002年には、学校が完全5日制になりますから、今からその時のためにも各団の充実を図っていきたいと考えています。

木川本部長：子どもたちを見ていると、身体を動かす機会が減っているようで心配です。スポーツ少年団の教育的活動をもっとアピールする必要があると思っています。また、学校との連携をさらに良くするためPTA総会等の機会を捉えて理解を深める努力をしていきます。

皆さんのお話を伺っている最中にも、話に対する意見や提案が他の人から出されました。中でも団員減少に対する解決策として、松田団長が言われた「女子は年間1種目なので魅力が薄れてきているのではないだろうか。男子のように2種目、例えばバレーとバスケットにしては」とか、岡野副本部長が言われた「他地区で自分が体験したことですが、減少で困っている状況を親たちに話したら、口込みで仲間を集めてくれました」といった話は、解決への参考になった気がします。

そして、最後に尾島副本部長が「中学校の部活動がこれから心配です。中学生のスポーツ活動を地域の中で保障していくとしたら、今の小学生を中心とした少年団から、もう少し広げて小・中学生の少年団へ、活動や指導者体制の整備・充実を図る必要があります」という意見は、現実的に小学生が中心となっている全国のスポーツ少年団の共通の課題であり、これからのスポーツ少年団の発展にとって核心的な問題ではないでしょうか。

今回取材した日高市の各スポーツ少年団は、発足以来、学校単位で団活動が展開されています。そのことが、学校と地域・スポーツ少年団とが連携し、協力し合って活動を展開できている大きな要因となっているようでした。

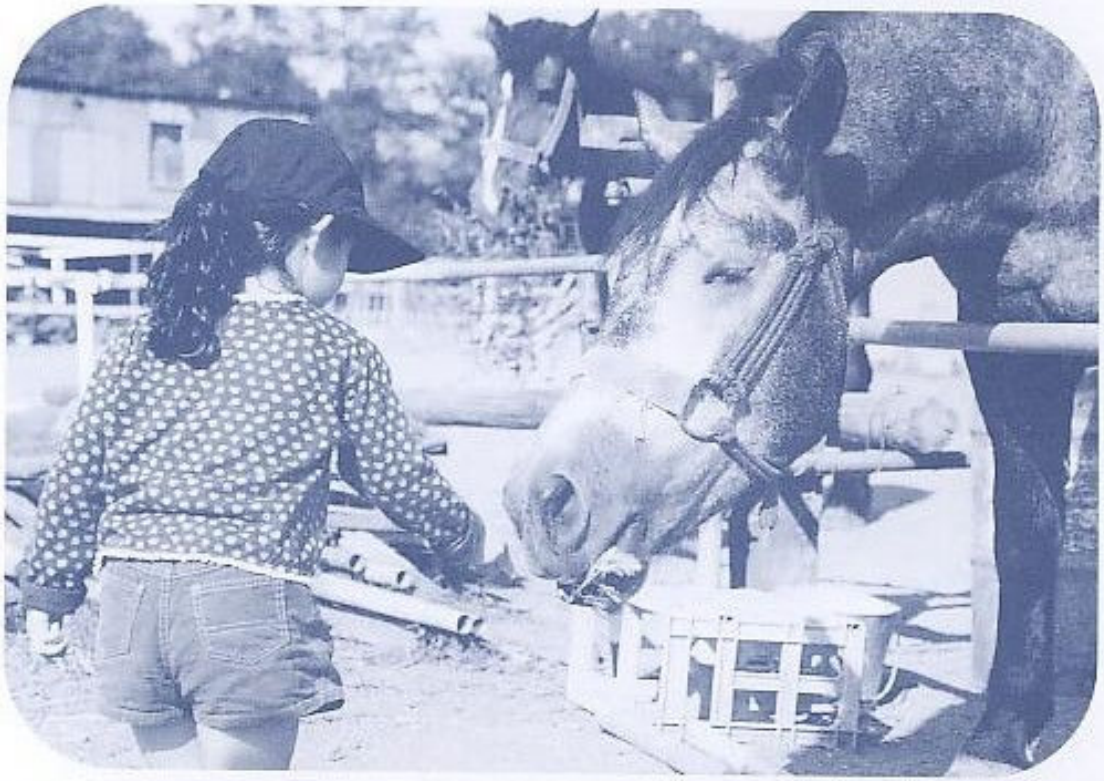
「学校型スポーツ少年団」という言い方はありませんが、高萩北スポーツ少年団を含む日高市のスポーツ少年団の場合、発足時から現在までの経緯を考え「学校型」と呼ぶことにしました。学校との連携で悩んでいる全国の指導者にとっては、ひとつの好例といえるのではないでしょうか。

（広報普及部会員・佐藤高弘）

SPORTS for all

日本体育協会では，日本馬主協会連合会からのご支援を得て，公認スポーツ指導者の養成，スポーツ少年団の育成，スポーツ医・科学の研究などの諸事業を実施しております。

みんなでスポーツを!!



日本馬主協会連合会

東京都港区虎の門4－3－13 秀和神谷町ビル602号

☎03－5473－8420